かりの長編「呪文」（河
出書房新社）の著者、星
野智幸氏はそう話す。

かっていくというテ
トピア的状況に陥る。
「ヘイトスピーチなど

私の履歴書

荒蒔 康一郎 ⑫

採用面接

講堂で指定された椅子に座る。「では最初に英語の試験をやります」。焦った。

「試験なんかない。安心しろ」。キリンビールにいた先輩に就職対策を聞きにいくとこう教えてくれた。ところが会場の東京工場に行くと勝手が違っていた。芝生の庭で参考書と辞書をにらめっこしている人たちが多くいた。1963年（昭和38年）6月のことだ。会社から筆記用具を持ってくるように言われていたので「性格試験でもやるのかな」と気楽に考えていたのが間違いだった。会場となった講堂で指定された椅子に座る。「では最初に英語の試験をやります」。焦った。

気を落ち着かせて、答案用紙に向かう。次は第2外国語でドイツ語を選択。内容は微生物に関する内容だったと記憶している。後で分かったが発酵系を専攻する大学生だけが集められていた。試験が終わると「明日は東京・京橋のキリン本社に午前9時に来るように」と言われた。

当時の本社は酒類卸大手でキリン創業時に総代理店として販売を手掛けていた明治屋のビルに間借りしていた。巣鴨の寮から都電を乗り継ぎ京橋へ。そして自分の番がやってきた。最初に人事部長が「テストはどうでしたか」と聞いてきた。「英語は70点、ドイツ語は60点でしょうか」。面接官が互いに見合って「ニヤッ」と笑う。

専門分野についてはそつなく答えたが、最後の質問で拗（こ）けた。事前に書類提出していた中で「どんな雑誌を読んでいますか」という質問があり、「世界」と「中央公論」を書いていた。「なぜ『世界』を」と人事部長が聞いてきた。「寮でみんなで読み回している」と話すと「でも、なぜですか」と同様の質問をしてきた。「世の中がわかると思います」。再び面接官同士が顔を見合わせた。

この時ばかりは「落ちた」と思った。まだ60年安保闘争の影響が残っていて、リベラルな「世界」は〝大人の世界〟からすると煙たい存在のようだった。今ではこんな質問はない。時代が時代だった。

不意つかれた語学試験

「サイヨウ」の電報 ホッとする

翌日、寮に電報が届き、期待もせずに封を解く。「サイヨウ」の文字があったときには本当にホッとした。本郷の大学に行き、指導教授の有馬啓先生に報告すると意外な言葉が飛び出した。「就職するのか。研究らしい研究もできんぞ」。先生は不満げで「変わってるな。もっと研究できる会社を紹介するぞ」と何度も翻意を促された。

しかし、もう自分では心に決めていた。「社会に出るんだ。研究から足を洗おう。自分の人生を切り開いていこう」。先生も納得してくれた。

社内報で社長（左端）と懇談（右から3人目が筆者）

11月ころ、人事部から社内報で社長と数人の内定者が社長宅で懇談する企画に参加するように言われる。当時の社長は戦前に三菱商事から来た川村音次郎さん。社長は緊張している私にこう言葉を掛けて下さる。「ああ、君は農学部だからアラマキか（笑）。種は細かく蒔かないと……」。「はいそうです」とうなずいた。

「はい」、「はあ」ばかりで答えていたが、社長が海外事業について語ったときの受け答えだけちゃんとしていた。「国が違うっていうことは、人間の心理的なものも違うってことでしょう」。これは全く意識していなかったが初めての米国出張で身をもって味わうことにつながる。

さて4月1日の入社式。私はとんでもないことをしでかしていた。

（キリンビール元社長）